

今日の夢追い人

藤原英明

東京大学理学部
天文学科4年

銀河学校に参加したのはもう5年前のこと。あの頃は若かったな。と高校生を見ては嘆いてます。科学普及に強い興味が、最近、中高生に本物の科学の面白さを伝えるためのNPO法人を立ち上げました。



銀河学校は今年で7回目を迎えた。今回の銀河学校では、僕を含め5名の卒業生がアシスタントという形で参加し、指導に当たった。

今年のテーマは「天体のスケルトン」。口径0.5センチメートルのシムシト望遠鏡の筒先に対物プリズムを取り付けて撮影した天体のスケルトンから、宇宙から来る様々な情報を引き出そう、という壮大な(?)計画である。

僕が担当したグループでは、スケルトンの形から星の温度を求めることになったのだが、その面白さを伝えるのには、とても苦勞した。特に最初の解析作業は、高校生が想像していた華やかな「天文学」

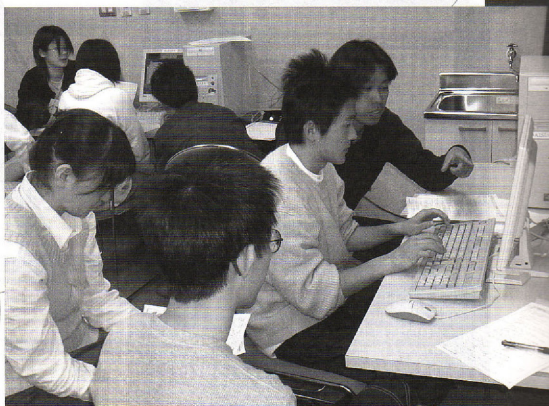
3月下旬、雪の積る木曽の山中に、若々しい声が響いていた。長野県にある東京大学木曽観測所で毎年行われている高校生向け観測研究セミナー「銀河学校」が、今年も始まったのだ。参加したのは作文審査によって選ばれた高校生で、東は群馬から西は福岡までの各地から30名が集まった。

天文に飛び込んだ学生たち

18 天文学の魅力を次の世代へ!

学問としての天文に初めて触れて目を輝かす高校生の姿は、5年前の自分に重なるものがありました。最前線の天文学に触れたばかりの筆者に(6月号参照)、初心を蘇らせた銀河学校でした。

宇宙への夢



コンピュータでの解析の様子。教えてる自分も疲れてます。

と、作業中、高校生の顔に「辛い」と書いてあった。

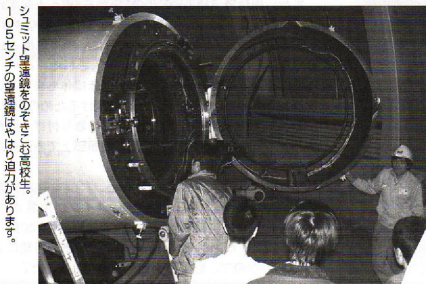
しかし、解析が進み、スケルトンから星の温度を求める手法を自分たちで組み立てるという段階になると、みんなの目の輝きは変わっていった。自分の頭でウンウン考えることの面白さに気づいてくれたようだ。ついに「温度計」を当ててこそでないような遠くの星の温度を、スケルトンから推定できるなんて、すごい!と感動する人まで現れた。僕は、やった! とガッツポーズをした。

銀河学校が終わってから数日後、聞くとところによると、銀河学校で研究したことを発展させて、日本天文学会ジュニアセッションで成果を発表したい、という声が、参加者の中からうそくあがっているという。「学問」としての天文の楽しさがしっかりと伝わっているようだ。指導した甲斐があるつもんだ!

今回、立場を変えて銀河学校に参加してみて、「銀河学校は参加者にとってはすべての始まりに過ぎない」ということを改めて感じた。そういえば僕が「天文学者になろう」と真剣に考え始めたのも、銀河学校に参加した直後だった…。「始

WHO'S NEXT 次回は...

この号をもって、藤原氏の執筆は終了。次回の語り部は、筑波大学2年生の内海洋輔氏です。彼曰く、「スリル! 宇宙の世界」に引き込まれてしまっている」。その引き込まれ様を生々しく語っていただきます。(ナビゲーター米田記)



シムシト望遠鏡のそそりた筒身。10.5センチの口径は、迫力があります。

まり」に過ぎないからこって、天文学のおもしろさを伝える、という僕らアシスタントの役割が重要なのだろ。また、僕ら自身もアシスタントという立場を介して、「若かった頃の自分」に再会し、自分自身の夢を見つめなおしているのかもしれない。今年の参加者は5年後、どのような道を歩んでいるのだろうか。いまからしても楽しみである。できれば、銀河学校で得た「感動」を次の世代の人に伝えてほしい。広がれ、宇宙の輪!